

中道豪一 提出 学位申請論文（課程博士）

『神道教育の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、神道を教え伝える教育という立場から、近現代の学者と実践者を取り上げて、それぞれの特徴を再検討して、神道教育のあり方を考察した研究である。

序章「神道教育研究の課題と展望」では、荷田春満の『創倭学校啓』など近世の多大な成果に比して、神道を実践的な観点から取り組んだ研究が少ないと思われる。そこで岸本芳雄の「神道教育」という概念にしたがって、「教え伝える」立場から先行研究を整理した上、教育のあり方を三分類して、直接・間接型に分

けて後者を一・二類と区分した。神道研究と教育活動という直接型の河野省三、さらに神道周辺を間接型とし、一類を研究と教育に尽力した西晋一郎・小林健三・入澤宗壽・山崎博、二類を社会教育に取り組んだ近代の石門心学に分けて考察している。

第一章の「河野省三の神道教育、直接型」では河野について、神道内部から教育する立場を扱っている。特筆すべきは神道の説き方にあり、国学や復古神道に基づいた神道論に加えて、「日本民族の伝統的信念及び情操」と捉えた。日本民族の生活原理は産霊の力に秘められており、天照大神が示した道に他ならないとして、時代の要請する表現法のもとに「大和心」を展開した点が見落としがたい。

神道とは神祇を崇敬して明浄正直の生活を営むべき所とし、「統一性」「永遠性」「純真性」という三要素から成立すると説く。そして民族性を考察して分りやすい「日本心」という観点に置き換えて、「神々しさ」「懐かしさ」「清々しさ」を論及する。あるいは「雄々しさ」「みやび」「大らかさ」という心情も、こうした

日本心の組み合わせから説明されており、これこそ神道教育の対象とすべきものであったと指摘する。

自らの生活信条であった「嗜みの生活」とは、日本心を培う手段として有益な指標したと説く。このような神道的生活は、限定した時間・空間において意識的に表現し発揮されるもの、同時に日常の心掛けを指すものである。国民道徳とは国民が遵守すべき特有の道徳であり、ひろく国民生活・国民道徳・日本精神という河野の主張も、こうした文脈に沿って理解する必要があると説く。また一方では神職として、神道を中心とする国民道徳のあり方をめぐって、神道を伝えるべき講演を重ね、国旗・国歌・冊子・揮毫など、様々な啓蒙活動を展開したという。

第二章の「西晋一郎の神道教育、間接型一類」では、現実社会における実践性を理論的に究める立場から、倫理学の権威と称された西の思想分析を行なっている。実践的な「孝」が単なる家庭道徳ではなく、天然の愛育、宇宙の根源的生命に帰する境地であり、遂に「忠孝一致」を重視するに至ったというのが特徴であ

ろう。

神道論としては『天地開闢即国家建立』『人間即家国の説』にみえ、天地開闢を中心とした神代伝説や歴史の説きかたに注目する。天地開闢とは「遡及可能な時間的限界の表現」という理解のもと、「循環の働き」を営みつつ反省・自覚の材料として、「即今の太古」を実現することにある。その自覚と反省の向かうところが「永遠」であり、神物一体の真実を段階的に深めてゆく。さらにそれを知る「人」、即ち天皇とその国民があつてこそ、「生きる」という真実のすがたに繋がるといふ。忠孝の実践によつて神道精神が具体化されると説き、このような「人」の世界こそ本然の姿という連関性にたつて、日本の国柄、或いは創造の学としての国体学をよく示していると構想した。戦前においては実践倫理の大家であつたが、戦後の厳しい世相にあつて幾多の批判に曝されたと説いている。

門下の小林健三への言及は分量的に少ないが、国体学とは日本精神を根本原理として、哲学・倫理・法制・経済・歴史を包含した、新たな創造をめざす総合学

である。そして「四次元の神道」から「むすびの思想」におよぶが、神道界からは新宗教の創唱と評価されていたとする。

第三章の「入澤宗壽の神道教育、間接型一類」では、入澤宗壽・山崎博が大正から昭和にかけて行なった教育実践について、学校教育の観点から考察する。入澤は「文化教育学」という革新的な学説を提唱し、特徴は古典・祝詞など神道色ゆたかな教材を用いて、学校教育を通じて神道的思考を培うという構想である。日本文化を架け橋として、神道に至るべき体験を模索した教育であった。文化の根本である「惟神の道」を目指して、「根源的な生命から派生した文化」を重要視して現代文化を創出するため、それらを具体化する新たな体験教育を試みたのである。入澤の『日本精神への道』などで示した神道と教育実践、また山崎の『日本文化教育学』にも、文化教育学に支えられた神道への理解のありかたを窺うことができる。

実践の場となった川崎市の田島尋常小学校において、山崎が学校長を勤めた大

正十三年から十年間にわたって実施され、その名声は教育者の巡礼地というべき「田島体験学校」として全国に鳴り響いた。「よりよき日本人を育てる」という教育目標を掲げて、歴史と伝統に包まれた文化価値を体験することに重点をおき、生活指導上の具体的な事例を明らかにした。神道教材の活用に止まることなく、直接関与しない素材をも選択し、児童の自発性に基づいた労作体験の方法を、多様な視点から興味ぶかく考察している。

第四章の「近代石門心学の神道教育、間接型二類」では、神道の外部から社会教育に尽くした近代の石門心学を取り上げ、参前舎の川尻寶岑・山田敬斎に焦点を絞っている。石田梅岩は神儒仏の中でも、とりわけ神道を重視したと評価し、その系統にたった川尻も道話の名手として活躍した。その著『道徳の起源』において、「現実に活きる天地開闢」から人生の常則に説き及び、教育勅語の内実とは天御中主神を根本神として、天皇をして語らしめたものと理解した。

昭和心学の隆盛を支えた山田は、戦後の混沌とした世相にあって、祖国の復興

と道義の高揚を訴え、現実そのものを神代の現れとみて、神道をふかく捉え直した。さらに高松宮家との濃やかな交流など、神道の核というべき皇室との深い関わりを力説して、貴重な実績を収めたと論じている。

従来、「神道教育」と神道教化との線引きがやや明確でなく、思想・倫理との学問領域にも曖昧さが免れない。そうした観点から反省を加えつつ、神道を教え伝えるべき諸相を辿って、確固とした視点や立場と共に人間教育の背後にひそむ神々の姿、揺るぎない精神性が大切であると結んでいる。

論文評価の要旨

本論文は、神道教育の在り方をめぐって、近代教育制度の黎明期および確立期以降に焦点を絞って分析・検討しており、着実にして特質にみちた論文である。

「神道教育」という領域に精力的に取り組み、河野省三・岸本芳雄を手始めとし

て模索し、神道それ自体における清新な学的成果を積極的に評価した。また西の
実践倫理の世界に踏み込み、「孝」の人間創出に取り組んだありかたを見届けて
いる。

まず序章の「神道教育研究の課題と展望」において、戦前に神祇教育、戦御に
は岸本が「神道教育」と称した概念そのものが不明確である。神道教化という用
語との区別が明確にされておらず、その後の研究においても熟成されたとは言
いがたいのが現状であろう。神道の内、顕在化しやすい神道（見える神道）に限定
したとしても、それを教育体系として構成するためには、教育カリキュラムとし
てのスコープ（教育課程編成の際の学習内容を規定する範囲）とシークエンス
（教育課程編成における指導体系、順序性）が不可欠であり、それが明確になっ
ていなければ「教化」は行うことができても、「教育」として成立しないのでは
ないかと考えられる。今日、全国神社では「神道教化」と呼ばれ、社頭における
啓蒙活動が展開されている。「教化」と「教育」の関係には問題が多いが、どう

概念規定しカリキュラム構成できるか、そこに神道教育成立の可否が問われているのである。

神道の事例分類で捉えようと、直接型の「河野省三の神道教育」では「懐かしさ」「神々しさ」「清々しさ」という三要素を核心においているが、知識と教材を内容にした神道教育とは、あくまでも社会教育もしくは社会教化の範疇に属するものであろう。そして神道倫理の「神々しさ」「清々しさ」という根本には、厳然とした天皇に対する豊かな忠誠心があり、それ無くして明き清き心すら成立しなかった。一木一草まで浸透した天皇との距離感を計りつつ、飽くまでも慎重に論議を進める必要性があろう。

わが国の伝統文化を背景として、日常生活の中に潜在化している「見えない神道」である神々と信仰をめぐって、神道教育の内容とするにはかなり困難が伴うと考えられる。神道及び神道教育に関して古典・祭礼・歴史、あるいは心性・感性をめぐる言語を超えた世界を、等しく言語化する営みが大切であるが、その点

について明快に説明できるか、問題が残されているように思われる。

間接型一類の「西晋一郎の神道教育」では教育活動、延いては国体学教室の取り組みも、倫理学や東洋道德といった背景から、神道的人間を造りあげる社会教化であったと云えよう。同時に教育勅語が根本に据えられており、仏教・キリスト教の立場からも、これに表面的には反対できなかった。そうしたことを議論の前提として、間接型の根本に据えておかなければならない。また後継者の小林健三について、「四次元の神道」という深刻な視点を描くが、その主張は宗教的であっても、教育という主題からは遠ざかったという印象が否めない。

同類の「入澤宗壽の神道教育」では入澤自身の「文化教育学」と事歴をはじめ、田島体験学校長の山崎博が進めた体験的な郷土教育によって、社会要請に応える教育および実践を検討した。殊に山崎の実験校を回顧して、意欲的に実践した体験学校であり、「よき日本人に育てる」という目標をもって、その方法を検討するのが当面の課題とした。主題に設定している神道教育の概念形成に、影響を及

ぼした先人の思想や業績を丹念に精査論考している点、神道学における教育的アプローチの可能性を探るといふ真摯な研究姿勢と相俟って大いに評価できる。ドイツ文化教育学を背景とした学校教育、生活科・郷土科といった郷土教育は異色なものである。しかし西洋教育学および倫理的視点の融合という面で倫理的な飛躍が感じられ、主題とする神道教育の概念そのものを、却って不明瞭なものにする要因となっている。

間接型二類の「近代石門心学の神道教育」では、石田梅岩が唱えた石門心学の系統にたち、近代における参前舎の川尻寶岑・山田敬斎に焦点を絞った。庶民教育として明治の激動期に心学の精神を引き継いだが、一般社会にはあまり浸透しなかった。欧米文化やキリスト教の流入する現実に抗しがたく、社会的にも後退してしまい、有効なカリキュラムを広げることなく終わったが、その理由を詳しく論証すべきであった。心学は教育の枠組みというよりも、実践哲学の色彩を帯びた市井の私教育機関における社会教化活動であり、入澤・山崎の展開した公教

育は学校教育、文化価値を背景とした郷土教育であって、互いに性格を同一にするものではないと考えられる。

総じて神道教育で「教え・伝える」べき教育内容とは具体的に何なのか、より明確にしてゆく必要がある。直接型・間接型一類・同一類と分類した「神道教育」における知識啓発、技能習得、人格陶冶といった目的性・計画性・実行性を、それぞれ区別して説明することが肝要である。また戦後の公教育に於いては宗教教育が禁止されている状況下、果たして神道に触れないで神道を教育する方法、あるいは神道を到達目標とする教育の在り方が可能であろうか、そうした近現代の神道教育が抱えている課題に向かって、今後とも探求してゆくことが望まれる。

以上の理由によって、本論文の提出者中道豪一は、博士（神道学）の学位が授与される資格があるものと認める。

平成二十三年十二月十六日

主査 國學院大學教授 中西正幸 印

副査 國學院大學教授 安蘇谷正彦 印

副査 國學院大學教授 田沼茂紀 印

中道豪一 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（神道学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十二年十二月十六日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	中西正幸	印
副査	國學院大學教授	安蘇谷正彦	印
副査	國學院大學教授	田沼茂紀	印